

「クリブ^(注1) ヒストリー」 part 1

— 図書館の過去・現在・未来 —

加藤 恭 輔



ガラス貼りの名古屋図書館。清潔感が漂う

図書館の歴史は、60余年の伝統を誇る中京大学の歩みと軌を一にする。校倉造りの面影を残していた旧名古屋図書館。1971年には豊田キャンパス設置に伴い、図書館豊田分室が誕生。80年代後半には世界中の図

書館の電算化の流れに合わせて、本学も電算化を図った。95年にはセンタービル（0号館）にライブラリーサービスセンター、そして2013年には中部地区の大学図書館で初の自動書庫を持つ新名古屋図書館が、

注1：クリブ

シリーズのタイトル「クリブヒストリー」の由来ともなっている「クリブ (Culib)」は、1998年に中京大学図書館の略称として採用された造語。「C」は Chukyo の C、「u」は University の u、「lib」は Library の lib。本来はキュリブあるいはチュリブと読むのが正しいのだろうが、読みやすさや親しみやすさを考慮して、クリブと読むことになった。

図書館・学術棟（1号館）にお目見えした。法学文献センターを含め、大学全体で4館体制を敷くのも、11学部を擁する本学ならではの特色である。その図書館の歴史を「現在」から「過去」に遡ってひも解き、「未来」のあるべき姿を模索したい。

第1章「建学の精神」担う学術の拠点

第1節 「静肅な環境」と「能動的学修」の両立

地下鉄八事駅の5番出口から地上に出て、山手通り沿いに100メートルほど北へ向って歩くと、ガラス張りの美しい図書館・学術棟が目飛び込んでくる。1階の正面玄関をくぐり、左にエスカレータを見ながら、「アトリウム」と呼ばれる空間を通過して名古屋図書館の出入口へ。

地下鉄の改札口と同じように、ICカードを当ててゲートを通り抜けると、広い閲覧室が眼前に広がる。静寂な環境の中で、黙々と読書や学習に励む学生たち。パソコンで授業の課題レポートに取り組む姿も見られる。閲覧室の右手奥には大型本用の書棚や開架書庫が立ち並び、図書が整然と並んでいる。その奥の窓際には4人掛けの閲覧机が16台あり、明るい陽光が差し込む。学習環境としては抜群だ。

2階開架閲覧室は中2階式で、閲覧席と開架図書がある。特に中2階部分は静かに読書、学習ができる環境となっている。試験期間ともなれば、1階と中2階、2階にある個人学習席と閲覧席（全体で474席）はぎっしり。夜10時の閉館まで熱心に勉強をする学生も少なくない。

その一方で、学生たちの人気が年々高まっているのが、能動的学修支援施設「ラーニング・スクエア」だ。

昨今の情報化社会では、活字離れ、読書離れが深刻化し、大学でも漢字が十分に書けない学生や、本を読まなくなった学生が増えてきていると言われ、その結果として、コミュニケーション能力の欠如が、社会的に広く認知されている。IT能力の向上とは裏腹に、「心の交流」が苦手



名古屋図書館ラーニング・スクエアで
グループ学習をする学生たち

なために人間関係が円滑にいかなかったり組織に順応できなかったりして、就職後3年以内に離職する者も少なくない。このため、大学教育に対しては、ただ授業を受けるだけの「受動的な学習」ではなく、学生たちがグループで学習し、

活発に議論をしながらコミュニケーション能力を培う「能動的学修」を推進する必要性が指摘されている。その突破口と期待されるのが「ラーニング・スクエア」である。

社会人基礎力を身に着ける土台となるのは、「読む能力」「書く能力」「議論する能力」である。学生の学習時間や読書量の増加を促し、学生同士が切磋琢磨できる空間を整備することは、大学図書館の使命でもある。「ラーニング・スクエア」は、大教室での受動的な授業では不可能なグループ学習を展開し、学生の潜在能力を引き出す可能性を秘めた空間であるといえる。

名古屋図書館に設置されたラーニング・スクエアでは今、学生たちがグループで議論したり、パソコンやプロジェクターを使いながら課題作成したりする「能動的学修」を精力的に展開する姿がみられる。今後、各学部が授業やゼミの一環として行っている企業とのコラボレーション、他大学との学修・研究交流を積極的に支援し、学生たちの社会人基礎力の強化を図るためには、ラーニング・スクエアの存在意義はますます高まっていくだろう。

第2節 中部の大学で初の自動書庫

名古屋図書館の目玉の一つは、80万冊を収容できる「自動書庫」の存在だ。1階中央の階段の右手に、6台のOPAC^(注2)端末が設置された検索コーナーがある。その端末の画面で、読みたい本が6号館地下の「自動書庫」に保管されていることが分かれば、取り出しボタンをクリック。オンラインによって、バーコード検索された蔵書が、自動書庫からコンテナに乗って一階の閲覧カウンターに運ばれてくるシステムだ。パソコン画面でお目当ての本をクリックしてからカウンターで入手するまでに、わずか3分ほど。教員や学生が研究室や学内の自分のパソコンからも検索、取出し指示できる優れものだ。



自動書庫では、パソコンで取り出し指示を出した図書をコンテナで運ぶ

このほか、名古屋図書館の地下1階にある「貴重書庫」も、本学の売り物の一つだ。特に江戸時代以前の国文学関連の古書が充実している。南北朝時代の1380年に書かれた「源氏物語」の写本、カール・マルクス「資本論」の初版本など200冊以上の貴重書がズラリとならぶ。書

注2：OPAC（オーパック）

Online Public Access Catalog の略。コンピューターを利用し、オンラインで蔵書を検索することのできる目録のこと。パソコン画面に書名や著書名などのキーワードを入力し、OPAC で検索することで、自分の探している資料が中京大学図書館にあるかどうかを調べることができる。



名古屋図書館貴重書庫。本が傷まないように
温度や湿度の管理に留意している

庫内の温度、湿度の状態を適性に保つため、エアコンはつけたまま、冬は湿度が下がるので加湿器を作動させるなど、その保存管理には細心の注意を払っている。

この「自動書庫」と「貴重書庫」は、本学への見学者たち

からも好評だ。2015年4月以降も、韓国や中国の高校生、アメリカやカナダなど海外からの留学生がグループで見学に訪れ、自動書庫でコンテナがかなりのスピードで本を載せて、地上のカウンターまで運んでいく様子に、目をぱちくり。感嘆の声を上げて、スマートフォンのカメラのシャッターを切っていた。

名古屋キャンパスでは2010年、校地Ⅰの環境整備計画としてCプロジェクトが立ち上げられた。当時、図書館（旧名古屋図書館）のあった旧1号館を解体してその敷地と周辺に新1号館（現在の図書館・学術棟）を、本部事務室のあった旧11号館を解体して新11号館（現在の本部棟）を新築するという計画である。その1年前の2009年7月には、旧1号館奥の林を切り開き、新6号館新築工事が着手された。当時、旧名古屋図書館の蔵書数は約50万冊あり、この蔵書の一時保管場所が必要だった。そして、仮移転場所として新6号館に白羽の矢が立ち、それを契機に、2010年8月に完成した新6号館のG階（地下）に、約80万冊を収蔵できる自動書庫が設置されることになった。

第3節 名古屋図書館と相互補完する3つの図書館

名古屋キャンパスの中央に位置するセンタービル（0号館）の3、4階部分に設置されているライブラリーサービスセンター（以下LSC）は、1995年の設置当初から「本学学生の学習のための図書館」との位置付けだった。そのため資料はすべて“学生に読ませたい”、“学習の役に立つ”、“授業の参考になる”、“教員が授業で指定した資料”で、自由に手に取って利用することができるオープンライブラリーである。3階部分にLSC出入口があり、入るとすぐに雑誌新聞が読めるブラウジングコーナー、また右手には開架エリアが広がり、左手には視聴覚資料（DVDやブルーレイ）を見ることのできるAVコーナーがある。中央の螺旋階段を上った4階はオール開架閲覧室となり、LSCの閲覧席は計436席にのぼる。

さらに、名古屋キャンパス3館目の法学文献センター（以下LLC）は1998年、法学部のある校地Ⅱに新設された。それまでの分室（1990年設置）から、法学関係文献専門資料を所蔵提供する専門図書館としての役割が期待された。小規模ではあるが専門図書館としての機能を持たせるため、それまで旧名古屋図書館が所蔵していた法学関係専門資料の

ほぼ全てをこのLLCに移動して、法学部所属教員や学生のための図書館として機能するようにした。閲覧席は100席ある。

一方、豊田キャンパスに目を移すと、1971年に体育学部が豊田キャンパスへ移転したことに伴



センタービルのライブラリーサービスセンターで勉強する学生たち

い、同キャンパス4号館の2階部分に図書館分室が設置され、その後、1974年に豊田キャンパス本部棟が新築されると同時に、図書館分室も本部棟1階と2階部分に移転して図書館豊田分館となった。1988年には現在の豊田図書館を新築し、念願であった図書館独立棟となった。

独立棟である豊田図書館は、地上3階建て（1階、中2階、2階、3階）の図書館で、1階と中2階には書庫が設置された。2階は利用者から見た図書館1階正面入口のある階にあたり、中に入るとすぐに新聞と週刊誌の読めるブラウジングコーナーがある。学生証や利用証が無くてもだれでも自由に利用できる空間だ。

図書館出入口のバーを押して中に入ると、閲覧カウンターが左側に、そのすぐ右手には3階閲覧室に上がるための階段がある。入口右手にはDVDやブルーレイを見ることのできる個人ブースが8台あり、その奥には閲覧机が窓際に沿って奥へと並んでいる。2階開架室奥には「キャリア・シラバス」コーナーを含む開架書架が並んでいる。

カウンター前の階段を上がった3階閲覧室には、談話を楽しめるラウンジや、読書・学習を集中してするための静粛学習室がある。ここは書

架も図書の配架もなく、個別に仕切られた45人分の個人机が整然と並んでいて静かに読書、学習をする場の環境が整えられている。閲覧席は全体で394席。

この豊田図書館にも今年夏、2階閲覧室の一部を改修して「ラーニング・スク



法学文献センターの入口から見た
情報検索コーナー（左）と閲覧室



豊田図書館に新設されたラーニング・スクエア（開設前）

エア」が新設された。秋学期から学生が早速、利用を始めている。中京大学の長期計画「NEXT10」で採択された能動的学修支援事業の一環として、整備されたものだ。既設の名古屋図書館ラーニング・スクエアと比較して

特徴的なのが、スクエア内の一部を自由に区切り、多様な利用方法に対応できる「プロジェクトスペース」が設定可能なことである。

全国の大学におけるアクティブ・ラーニング・スペースの設置数は年々増加し、その数は急カーブで上昇。各大学ともハード面、ソフト面での一段の向上に努めている。大学間の競争の背景には、2010年12月文部科学省科学技術・学科審議会学術分科会提唱「大学図書館の整備について—変革する大学にあって求められる大学図書館像—」において、学修支援の重要性が強調されたことも、大きな要因となっている。

また、2014年12月の中央審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」の中でも、主体性を持って多様な人物と協力して学ぶことのできるアクティブ・ラーニングの促進がうたわれている。

今後、高校でも小論文やプレゼンテーション、集団討論などが活発に行われるようになり、将来、本学に入学してくる学生たちの間でも、「能動的学修」態度を身に着けた人材が増えていけよう。そうした新入生たちの受け皿として、「ラーニング・スクエア」の役割は、さらに重要になってくる。

多様な学生のための多様な図書館。4つの図書館の蔵書数は2015年3月現在、100万冊（製本雑誌を含む）を突破した。今後、4館の特色を生かし、相互に補完させ合いながら、さらに時代のニーズにマッチした図書館像を考えることが、われわれの使命でもある。（続く）